

開催期日	講演会、講習会等開催名（開催地）	主 催 団 体	掲載ページ
10/28(土)	(社)日本家政学会関東支部研究発表会・講演会（東京家政大学、東京）	(社)日本家政学会関東支部	6号, p. 98
11/5(日) ～9(木)	高压バイオサイエンス・バイオテクノロジーに関する国際会議（国立京都国際会館、京都）	高压バイオサイエンス日欧合同研究会	3号, p. 67
11/7(火) ～9(木)	第16回日本熱物性シンポジウム（広島県情報プラザ、広島）	日本熱物性学会	6号, p. 99
11/9(木) ～10(金)	第35回油化学入門講座—生理活性脂質群とその周辺—多様性・酵素・機能・遺伝子・分析—（工学院大学、東京）	日本油化学協会生物科学・工学部会	6号, p. 99
11/24(金) ～25(土)	第10回日本香辛料研究会学術講演会（京大会館、京都）	日本香辛料研究会	3号, p. 67
11/30(木) ～12/1(金)	第19回人間-生活環境系シンポジウム（京都リサーチパーク、京都）	人間-生活環境系会議	6号, p. 99
1996年			
7/22(土) ～27(木)	IFHE 第18回大会（バンコク）	国際家政学会 (IFHE)	3号, p. 65

書評**酒の科学**

吉沢 淑 編

朝倉書店, 定価 3,800 円, 1995 年 2 月発行

酒は様々な面で人々と深い係わりを持ち、生活を楽しくしてくれるものであり、酒に対して高い関心を寄せる人は多い。酒の起源は数千年以上遡ることができ、東西それぞれの地域で風土に合わせた原料と製造法で酒が造られ、独自の発展をとげて現在の多様な展開に至っている。

本書はシリーズ「食品の科学」として、「食と健康」へのアプローチを試み既に『酢の科学』、『茶の科学』、『魚の科学』など多数出版されている書に並ぶもので、編者は長年国税庁醸造試験所で酒の研究に携わり、同所長を勤めた方であり、他の執筆者もそれぞれの酒の製造及び研究で造詣の深い方々である。

本書は1章で酔いの生理、酔いを適度にコント

ロールする適正飲酒を含めた飲酒の文化史と現代の飲酒の態様について考察し、2章で原料、関与する微生物とそのバイオテクノロジーによる育種・改良、糖化・発酵・香気生成・熟成などの化学、工程の自動化・蒸留・廃水処理などの工学を解説し、3章では酒類の官能評価や食品衛生に触れている。4章以下は清酒、ビール、ワイン、ウイスキー、ブランデー、焼酎、スピリッツ、みりん、リキュールについて、それぞれ製造の歴史、特徴、製法などが記述され、13章にはその他の酒類として赤酒、地酒、中国の酒などが取り上げられている。限られた紙面に多数の酒類をあげているため、製法は概要のみで酒造に携わる技術者・研究者には同書店出版の『醸造の事典』が役立つといえるが、醸造学、食品学を学ぶ学生や、広く酒類に興味を持ち、より深い知識を得ようとする方々には一読をお薦めできる書である。

(実践女子大学 百瀬洋夫)

食文化入門

石毛直道、鄭 大聲 編

講談社, 定価 2,000 円, 1995 年 4 月発行

近年、食文化に対する関心が高まっている。大

学の家政学系の食物関係の学科において食比較論や食文化論などの授業科目が増加している。従来にはなかった新しい科目である。食べることは、生き物すべてにとって生命維持の手段であり、人間は誰でも食べ物のことはある程度知っているし、食べ物に関するそれぞれ独自の考え方がある。食

文化は、さまざまな分野からのアプローチができるよう、学問として成り立つためには、どのような体系付けが必要か、多くの人が考えつつ、模索しているのが現状であろう。

本書は、日本や世界の食文化に造詣の深い石毛直道氏と朝鮮半島の食に明るい鄭大聲氏が編著となり、編著に加えて太田泰弘氏、奥村彪生氏、山口昌伴氏、和仁皓明氏がそれぞれの分野の専門部分を執筆している。第一章文化としての食の中で、石毛氏は「食文化」と「食事文化」の違いを述べると同時に、食を文化として研究する方法について、「マニュアルとしての方法論はないにしろ、文化を考察するときに有効な姿勢は存在す

る。それは比較をすることと歴史を知ることである」としており、食文化研究の方向についての重要な示唆であろう。このような方向で、第二章食べ物と料理、第三章食事行動、第四章現代の食、が書かれており、世界における食の歴史を尋ねながら、また食に関する事柄について類似点と差異をわかりやすく述べている。書名に入門とあり、教科書としての制限で書ききれなかった事柄も多かったであろうと推察できるが、文献が多く掲載されており、専門的にいくらでも深めることができよう。また、一般的な読み物としても実際に楽しい一冊である。

(大妻女子大学 下村道子)

平成 7 年度会費納入のお願い

○平成 7 年会計年度は平成 7 年 4 月 1 日から 8 年 3 月 31 日までです。

正会員会費 平成 7 年度 8,000 円

学生会員会費 平成 7 年度 4,000 円

海外会員会費 平成 7 年度 10,000 円

永年会員会費 平成 7 年度 4,000 円

○第 46 卷第 1 ~12 号（平成 7 年発行予定）12,000 円

図書館、研究所等で会誌を継続して購読くださる場合の購読料は上記のとおりです。

○なお平成 6 年度会費未納の方も至急お納めください。
平成 6 年度会費未納の方には会誌をお送りしません

が退会のご連絡がない限り会費の請求をさせていただきます。

○新しくご入会の場合は所定（本号とじ込み）の入会申込書にお書き込みのうえ入会金及び該当会費を添えてお申込みください。中途ご入会の場合は 4 月号にさかのぼり会誌をお送りします。

○入会金は正会員 1,000 円、学生会員 500 円です。
海外会員については入会金は不要です。

○正会員及び海外会員であった期間が通算 40 年をこえた満 70 歳以上の方を永年会員として年会費を半額免除します。